戦争,平和。資料館

ピースあいちニュース

第**12**号 2012年11月1日発行

〒465-0091 愛知県名古屋市名東区 よもぎ台2丁目820 電話・FAX 052-602-4222



発行:戦争と平和の資料館ピースあいち

http://peace-aichi.com/

【定価:30円】

戦争と子どもたちのくらし展

2012年10月16日(火)~2013年2月23日(土) ピースあいち3階展示室

1931年の満州事変で始まった戦争は15年に及んだ。子どもたちは軍国教育を受け、この戦争に巻き込まれていった。その戦争が終わって67年一戦争の記憶は薄れるばかりである。当時の子どもたちの暮らしをいろいろな切り口で振り返ってみた。

当時、小学校で使われた教科書の内容は、軍国教育そのものであった。国語の教科書には、「ススメススメへイタイススメ」とあり、玩具の兵士4人が鉄砲を肩に行進する絵がついている。この教育の原点は明治30年に出された「教育勅語」にある。

男の子の遊びでは「チャンバラごっこ」もしたが、もっぱら「戦争ごっこ」だった。玩具は、子どもの士気を鼓舞するため、戦車や軍用機、潜水艦など戦時色のものが作られた。双六やカルタも戦時色濃厚なもので、なかでも野良犬の「くろ」が一兵卒から将校にまで出世していく漫画「のらくろ」が子どもたちの人気を



集めていた。

中学に入ると戦争の仕方を教える「教練」という学科があり、「学徒動員」という名のもとに、勤労奉仕や兵器生産に駆り出された。戦争が激化すると、小学校の高学年の子らは都会から田舎に移された。「学童疎開」と呼ばれた。その疎開先で三河地震に遭い犠牲となった子どもたちもいた。そうしたなかでシニカルな「替え歌」が密かに歌われていた。子どもたちはコミカルな「替え歌」を堂々と歌っていた。

たくましく生きた戦時の子どもたちの姿を見に来て いただきたい。

1階展示を模様替え



1階は、「現代の戦争と平和の歴史」を展示する場ですが、開館から5年を機に、リニューアル研究会を組織して展示内容の見直しを行いました。現在まで100年間の世界の動きを中段に年表形式でより詳細に掲示。上段に平和の動き、下段に戦争の動きについて、その時代の動きを象徴する写真によって、より視覚に訴えるスタイルとしました。

◆ハングル版案内書登場◆

外国からのお客様が増えてきました。英語版の案内書に次いで、5月にはハングル版ができました。最近、東アジアには不穏な雰囲気がありますが、だからこそ、東アジアの人々(特に留学生など)には「ピースあいち」を見ていただき、平和を語り合いたいものです。やがて中国語版も登場します。いずれも翻訳は名市大の平田雅己さん他のご協力によるものです。



せいひつ

静謐の中の熱気を熱い思い

― 「原爆の図展 |終わる 7月28日(土)~8月31日(金)

「ピースあいち」開館5周年記念イベント『原爆の図』展は、7月28日(土)来館者、マスコミ各社、ボランテイア、スタッフ等参加のなか、館長挨拶、丸木位里・俊夫妻映像資料紹介、丸木美術館からお招きした岡村幸宣学芸員のギャラリートーク等のオープニングセレモニーをもって、35日間のスタートを切りました。

主催者の心配をよそに、連日の猛暑にも拘らず入館者は増え続けたため、8月の日曜・月曜の休館日はすべて開館、入館者は2,296人に達しました。

会場では「図」の前で、息を詰めじっと見入る人、うっすらと涙する人、近づいては細部を見、離れては全体を見渡す人、それぞれが、戦争の記憶・「あの日」の記憶を取り戻しているようにも見受けられました。また、ご両親とともにしっかりと「図」に向かい合っている小学生のみなさんの姿も印象的でした。

「ピースあいち」の思いに応えてくださった入館者のみなさん、そのみなさんの熱意に動かされた「ピー



スあいち」の私たち。今、600枚を超えるアンケートを前にして、平和を愛する皆さんとともに歩む「ピースあいち」であり続けることを小に誓っています。

開催期間中、山田昌さん、天野鎮雄さんによる朗読の会「丸木 俊一女絵描きの誕生」があった。台本は脚本家で演出家の福村博一さん。ヒロシマの犠牲者の無念の思いを絵によって伝えようとした俊さんの生涯の物語です。芝居仕立ての台本だが、お二人とも抑制の効いた語り口であった。聴衆の一人が「山田昌さんが俊さんそのものに見えた」と呟いていました。

「ベルタ・フォン・ズットナー展~平和のために捧げた生涯」 5月22日~6月9日

1905年に女性初のノーベル平和賞を受賞し、19世紀末から20世紀初めにかけヨーロッパ平和運動に活躍したオーストリアの作家・平和活動家のズットナーを紹介するパネル・資料展をオーストリア大使館、立命館大学山根和代准教授のご協力により開催しました。

5月26日には、ズットナーの反戦小説「武器を捨てよ!」の翻訳者でもある愛知学院大学

准教授·糸井川修さんの講演会が行われま した。

ズットナーがダイナマイト発明者のノーベルの秘書であったこと、平和賞創設に影響をもたらしたこと、著書「武器を捨てよ!」では「武力に頼らない平和構築」を早くから訴えていたことを初めて知り、また、ズットナーの思想は時代を越えますます重要であるとわかりました。



■「ピースあいちブックレットNo.1 名古屋空襲と空爆の歴史 ―いま平和を考えるために」発刊

「ピースあいち」では、開館は、開館に4つのテーマで特別展を開催してのおりませた。開館5周まりた。中ででものでする。明館5周まりた。中ででは、特別のブックレットとしていまりました。



■戦時資料の分類・整理

今年度、「ピースあいち」は、愛知県から『戦争に関する資料の分類及び整理作業委託業務』を受託しました。県が収集した資料398点について、資料説明等を作成するというもので、ボランティア10人体制で取り組んで取り組んで取り、見たりしていた人でないと作れない場合があります。したがって、これも急を要する事業です。戦争体験の語り継ぎと共通するものを感じます。

■寄贈品から

5月1日から9月6日現在までに 56点の資料の寄贈がありました。 ○スタッフから

写真は、戦後、三菱重工で全 従業員に配布されたジュラルミン 製の洗面器。軍用機の生産が中 止となり、残った材料でつくられた そうです。



「ピースあいち」には90人のスタッフ・ボランティアがいて、開館日の当番を交代で務めています。また、総務委員会をはじめ広報班、資料班、ボランティア班など16のチームを設けて平和運動の仕事を分担しています。このうちイベント班では、企画展やイベントを計画・実施して話題をつくり、PRに努めています。今年の5月から夏にかけては、次のようなイベントを実施しました。

●ピースまつり 5月5日(土)・6日(日)

森島理事長の5周年挨拶のあと、ペガサスちちバンドの演奏でオープニング。恒例のバザー・カフェ・平和こま作り、おもちゃ病院、フェアトレードショップ、AHIショップ、地域の平和活動を紹介するコーナーのほか、午後にはあさのよしたか氏のギターによるミニコンサートを開催。2日目の《手打ちうどんピース亭》には、開店前から多くのお客様が並んでいました。また名古屋北医療生協名東支部による健康チェックコーナーも好評でした。午後には岡田園子・渡辺みかこ・錦城まりこ氏によるピースコンサートも開催されました。





●朗読会「天野鎮雄が読む"愛知一中予科練総決 起事件"嵐のあとに~とある少年と家族の記録」 6月16日(土)

開館当初から開催している俳優天野鎮雄氏による 朗読会。今年は、地元名古屋の高校で実際に起きた 戦時中の出来事とその顛末を、一組の家族の手紙や 日記を元に、南山国際高等学校の馬場豊先生が脚 本を書き上げました。

●パネル展「沖縄戦~50万県民を巻き込んだ地 上戦」 6月19日(火)~7月7日(土)

沖縄戦50年を機に出版された『終戦50周年特別企画これが日本国内唯一の地上戦だ!!決定版!写真パネル沖縄戦』(那覇出版社)のパネルが、沖縄県名古屋情報センターより寄贈されました。沖縄復帰40年という今こそ、多くの方たちに見ていただきたいと展示しました。



■講演「沖縄から67年という歳月の重み」6月23日(土)

沖縄慰霊のこの日、名古屋市立大学教授 阪井芳 貴氏に、今年復帰40年を迎えながら今なお米軍基地 下におかれ続けている沖縄について、民俗学を踏ま えながら講演をしていただきました。

●朗読劇「あの夏の空に届け」 7月7日(土)

南山国際中学・ 高校の生徒とお母 様たちが、俳優米 倉斉加年氏の作 品をはじめ13の作 品を朗読劇に仕 立てあげました。



●15歳の語り継ぐ戦争~金城学院中学3年生の 取り組み 7月24日(火)~8月31日(金)

開館時より恒例となった平和学習の発表。生徒たちが被爆地広島へ赴き、インタビューなど自分の目と耳で感じて作り上げた素晴らしいレポートの展示です。

●うえのたかし作品展 9月20日(木)~9月29日(土)

版画家である 作者が幼児期に 目の当たりにした 岐阜大空襲をモ チーフにした「炎 の記憶」15点を中



心に、「ぞうれっしゃ」の原画・コラージュなどを展示しました。

●名古屋芸術大学「Peace Nine2012展」 9月11日(火)~9月15日(土)

学生はじめ大 学の内外を問わず、さまざまな世 代の方々が憲法 九条や平和に成さいて考えて作成されたものです。芸



術の秋にふさわしく、アートから平和について考える 良い機会になりました。

戦争の記憶を語り伝える一高齢者の証言

今年で戦後67年経ちました。戦場体験者や戦争体験者が少なくなってきています。「ピースあいち語り手の会」では、これまで多くの方々に戦争体験を語っていただきました。その中から、4人の方の体験を報告します。(本文は長いものですが、紙面の関係上、短くしました。)

沖縄戦で4回の魚雷特攻出撃 浅野善彦

私は昭和2(1927)年生れ。家が貧しかったので、予 科練に入りました。18年6月、16歳で入隊しました。訓 練期間が終わると直ちに爆撃機の搭乗員として一線 に立ちました。トラック島の春島基地に配属されまし た。そこではアメリカのグラマン機と交戦しました。幸い にも穴のあいた戦闘機で基地に帰ることができまし た。19年、日本に帰ることができました。勤務地が豊橋 航空隊でしたので、1年4ヶ月ぶりに自宅に寄りました。 父は「お前生きていたか」といい、母は泣くだけでし た。

20年2月、B29の名古屋空襲が始まると、特攻隊が編成され、私は特攻隊員に任命されました。富山の小松基地を経て4月から鹿児島の出水基地に配属されました。そこで、特攻が魚雷攻撃に変更されました。魚雷攻撃は海面10mぐらいで飛び、目標500mくらいの距離で魚雷を発射投下し、そのまま超低空で飛んで敵艦を飛び越えるものです。

2ヶ月間の沖縄攻撃で私の隊は、隊長以下7割の戦 死者を出しました。私は4回出撃するも幸い生き残りま した。幸運の一言です。

亡くなった戦友の遺品整理は、明日は我が身と思うと一番いやな作業でした。そのときの気持ちが今では慰霊という気持ちになり、各地の慰霊祭に出かけています。

私はその後、松島基地へ、さらに北海道の美幌基地に転じました。20年8月山形の神町基地に新型爆撃機の引取りを命じられましたが、8月15日、終戦の放送とともに、飛行服のまま復員しました。

戦後、戦友会で8月下旬、美幌基地よりアメリカ本土の片道爆撃が実施されることになっていたことを知り、もし、終戦が10日遅かったら、私はアメリカ本土の土になっていたと思います。南方戦線で、沖縄特攻隊で生き残り、幾度か生死の境を往復しました。人間の生命の強さをいつも感じています。

私の予科練の同期生は650名中450名余が亡くなりました。18歳か19歳の若い命でした。私はいつも今日まで生かせて頂いたことに感謝いたし、「おまけ」人生と思って頑張っています。

初めての日本本土空襲

昭和17(1942)年当時、私は11歳でした。17年4月 18日午後1時半頃、米航空母艦から発進したノースアメリカンB25中型爆撃機による東京・名古屋・神戸の飛来が日本本土への空襲の初めでした。戦時下の早い時期から空襲は必至といわれ、防空演習も常に行われていました。

この日、我が家より北へ二筋の明治屋の斜め向い、広小路通り北側の百貨店十一屋の北の空を見なれない飛行機が一機、西方へ向かって飛んで行きました。子どもたちがそれに気づき「変な飛行機」と口々に叫びました。「なんだ、あの飛行機は?」「あんまり見たことない型だな」と言いながら見ていました。この飛行機の前後左右で、ボッ、ボッ、ズドッ、ズドッと白煙が上がり、誰かが「高射砲だ!」「あれは敵機だ」と言いましたが高射砲は一発も命中しませんでした。ややあって日本の戦闘機が2~3機、謎の飛行機に攻撃したが、

石田孝子

高度が違うのか、やがて機影は 見えなくなりました。空襲警報どこ ろか、警戒警報さえ記憶にないこの 日の出来事でした。

敵機は何もできず退散したのだとしか考えなかった。教えられていた神国日本、不滅日本は確かさを伴なって大きく心を占めていました。実際、敵機による被害もなかったことも、この考えをより強くしました。逆に見れば、勝利を続けている国の本土へ開戦4ヶ月余にして、少数機といえども進入を許したのです。

この日のことは「日本軍の対空射撃と戦闘機の邀撃 により敵機はなすべもなく逃げ去り、飛行機を発進した 空母は日本近海を逃げ去った。敵機は重慶へ行った」 と報道された。これが日本の空へ米軍機が飛来した 最初のことです。

戦争状態にある国の本土へ侵入した敵機に損傷

さえ与えず、やすやすと国内を飛行させ、国外へ出した。そして、それを逃げていったとの印象の報道にしたということでした。緊迫感は薄れたまま、緒戦の勝利

のなかで、やがてくる本当の空襲に思いを致せなかっ たのです。

あなたも知ってください、伝えてください、戦の悲劇 佐々木あき

昭和16(1941)年12月8日、私は国民学校5年生でした。太平洋戦争が始まった日です。そのときの私は、我が身に戦争が降りかかるとは思ってもみませんでした。

19年8月、国内における労働力の不足を補うために、中1から大学生に至るまでの男女を軍需工場に動員する「学徒勤労令」ができ、私は10月に豊川海軍工廠に配属されました。工廠は全寮制でした。親と別れて暮らすさびしさはありましたが、有名な慰問団が時々来て慰めてくれました。

いよいよ戦争が終局を迎えた20年8月7日、マリアナ基地を飛び立ったB29爆撃機124機の大編隊が海軍工廠の上空に現れました。警報の合図の無いまま攻撃が始まり、午前10時13分から26分間の出来事でした。その日は晴天でしたので空から廠内は丸見えだったらしく、絨毯爆撃そのものでした。多くの従業員や学徒は逃げ惑い、阿鼻叫喚の境地でした。2500余人が犠牲となられました。

想えば私には悔いても悔いきれない学友を逝かし めたことが今でも心の傷となって疼きます。当日職場を 交代してくれた友が爆撃の餌 食となったからです。私は豊川桜 ヶ丘ミュージアムの展示場で私と代

わってくれた彼女の学生服を見ました。辛く悲しかった時を想い出しました。幾星霜を経ても脳裏から離れることはありません。

話は前に戻りますが、惨事の翌朝には帰ってこなかった友を探しに行く義務がありました。寮を出ても道がありません。爆弾で穴だらけの道の辺りの惨状は13、14歳の子どもたちが見る光景ではありませんでした。無残です。私たちは言葉も出なく声を上げて泣きながら現場に行くのが精一杯でした。犠牲になった友は、父母を呼び、先生や友を呼び倒れていったことが不憫でなりません。

戦いの指導者は歴史に残りますが、罪無き友は教 科書の一頁にも掲載されません。戦争の怖さと命の尊 さを知っていただき、そして後輩などにも広く伝えて下 さることを懇願します。

扶桑丸撃沈一地獄の海から生還 上野三郎

私は昭和19(1944)年6月、30歳の時、二度目の応召で入隊し、戦地がどこであるか知らされぬまま、下関から扶桑丸で出航しました。台湾の高雄までは平穏な航海でしたが、高雄を出てからは日に数回警戒警報が鳴り渡りました。

10日ほど経った日の明け方、警報が鳴るとともに、物 凄い轟音と襲撃を受けました。一瞬で目の前は火の 海となりました。私たちは船底にいました。私はボート が被さって身動きが取れませんでした。もうこれまでと 思ったら、家族の顔が走馬灯のように浮かんできまし た。船が傾きボートがはずれ、動くことができるようになりました。甲板に上り、ボートに飛び降りました。そのボートはロープにつながれていて、本船から離れません。 最後と覚悟したその時、別のボートが私の方に落ちてきました。私はそれにつかまりました。14~15名の者が ボートに集まってきました。波が荒く、何度もボートが転 覆し、最後は7~8名になってしまいました。撃沈から数 時間後、ようやく駆潜艇に助けられました。 19年8月上旬マニラに上陸しました。我々はサンボアンガへ移動し、塹壕の構築などをしました。20

年5月、米艦数10隻が沖合いから艦砲射撃をしてきました。その破壊力には驚愕させられるのみで、我々の 壕などは跡形もなくなっていました。

我々の部隊はジャングルを切り開いて奥へ奥へと 退却しました。その後幾日経ったろうか、今晩米軍陣 地へ突入するとの命令があり、中隊長を先頭にジャン グルを進んだ。先発隊を見失い、わが部隊は解散となった。我々のグループはジャングルの中で生活を始め ました。餓死するものが出たり、狙撃されて命を落とす ものが出たりしました。

20年10月頃、我々は米機から撒かれたビラにより終戦を知り、捕虜になりました。マニラから内地帰還になり、21年2月復員しました。私は奇跡の連続で生還できたが、亡くなった方々の無念さは計り知れません。戦争はもうあってはならないと祈念しています。



戦争前夜の恐怖を語る 前田繁生

私が築港の八百屋に下宿して、タイル工場に通っていた昭和11 (1926)年。早朝、階下から私を起こす声が聞こえたと同時に、数人の男性が駆け上ってきた。「水上署の者だ、署まで同行してもらう」。たじろく私に、身支度もさせず連行した。以後、10カ月を水上署に留置。起訴後は千種の刑務所に3年間拘束。執行猶予つきで出所した。

私は大正7(1918)年米騒動の夜、大阪で生まれた。父は苦学生、母が働いていたので、生後15日目に名古屋の遠縁の家に預けられた。父が薬剤師になり、大阪で両親との生活が始まったが、父は研究のため当分会社に泊まりこむと出社し、そのまま失踪、生死不明になった。一家離散後は、京都の薬種商を営む伯父に預けられ、小学校を卒業した。その後、大阪の女学校に入学、母と同居し通学した。母が再婚したので、私は自活を考えて家を出た。名古屋市内のN内科医院に見習看護婦で住み込み、医師会経営の看護婦学校に休診時に通学、看護婦になった。

在学中、仲良しの友人Kから啓蒙を受け、徒弟制度の現状からの脱却を考え、卒業後、医院を退職。その後はタイル工場で働き、夜は「無産者診療所」に出

かけ、そこに集って来た 人たちの相談活動をし た。当時は日中戦争が始 まっていて、反戦者は検 挙され拷問。男性は中国 大陸に送られていた。



わたしが参加した時の診療所は医師不在で、治療はしていなかったが、その一年前は米沢進、青木文治の医師が無料で診療されていた。日中戦争が始まると弾圧が激しくなり、米沢氏はフィリピンに、青木氏は獄中から一兵卒として中国へ応召された。「軍紀違反犯罪者」だけの「星のない赤ベタの襟章」をつけられて昭和13(1938)年中国江西省で戦死している。

当時は日本全国にファシズムの波が荒れ民主化活動は弾圧された。わたしも無産者診療所に参加していたことで検挙されたのである。戦争は恐ろしい。言論は封殺、暮らしを守る闘いも許されなかった。

「戦争は絶対してはならぬ」が私の遺言です。

(2階展示室、「奪われた思想の自由」のコーナーで、前田さんの実績を当時の写真とともに紹介しています。94歳の前田さんに当時の想い出を綴っていただきました。)

団体見学で学ぶ戦争の時代

4月から8月末までの団体見学は、7団体、339人でした。7月14日には、「愛知サマーセミナー」の講座「戦争体験を聞こう」が開かれ、椙山女学園中学の2年生39名が訪れました。一行は午前と午後の2班に分かれ、それぞれ吉田理(おさむ)さんと長坂宗子さんの戦争体験を聞き、その後ガイドの案内で展示物を見て回りました。以下は、その時に提出された感想文の一部です。

◆今回、とてもためになるお話を聞くことができました。戦争については授業で習ったり、再現ドラマなどで知っていることは知っていますが、吉田さんのように直接体験した方から聞いたことはあまりなかったのですごく現実的に感じられました。

2階の方では写真を見ながら解説をしてくださり、 わかりやすかったです。今私たちが暮らしている名 古屋でそういうことが実際あったのだと考えると、な んだか不思議というか、私は戦争の上で生きている んだ、そう思います。

私は戦争を経験したことがありません。それは幸せだと思います。でもそれは怖さを知らないということだと思います。なのでこの経験を通して、もっと戦争について考えていきたいと思っています。本当にありがとうございました!また機会があれば家族でピ



◆戦争ってい うものは、ひど いものだと改め て思いました。





長坂さんの話を聞いて、戦争がどういうものか、分かりました。自己中な意見(感想)かも知れないけれど、戦争の時代に生まれてこなくてよかった、今の時代に戦争が日本でおきていなくてよかったと思います。 男の子が、弟を背負って順番を待っている写真が、心に残りました。あの男の子は、「悔しい」そう思っているのではないかなと考えます。

この夏「戦争」ということに対して、改めて、考えて みたいと思います。

県内をくまなく回る「語り手」たち 2012年度上半期 語り手の会の活動

6月25日に開催した「ピース あいち語り手の会」第4回例 会で本年度の活動は始まりま した。2011年度の活動を振り 返りつつ、2012年度の活動計 画を定めました。特筆すべき は、戦争体験語り事業の新た な形として「語り継ぎシナリオ」 の作成を課題としたことです。



(1)平和学習支援事業

県市で設置している「戦争に関する資料館調査会」からの委託によるこの事業も4年目に入りました。委託事業費の減に伴って、実施学校数が前年の15校から10校に減るとの内示でしたが、希望校の期待に応えて14校まで実施することとしました。名古屋市内は4校、あと10校は尾張、三河をくまなく廻る予定となっています。9月末現在で4校を終えています。

(2)夏の戦争体験を語るシリーズ

本年は、8月1日から15日までの10日間を使って10人 の語り手に登場していただきました。10回の開催で 335人(前年308人)の聴衆が集まりました。

(3)その他の語り活動

上記のほか東海地区の小中学校や各種団体からの要請に応えて語り手に語っていただいたのは13回に上りました。

本年は、日進市から小中学校全11校から語り手を 派遣してほしいとの要請があり、9月末までに3校を終 えました。

●映画上映会(映画による学習会)

毎月第2土曜日午後4時30分から行いました。 (参加無料)

4月14日「さくら隊散る」 1988年 5月12日「マザー・テレサー 2003年

6月9日 「英霊か犬死か〜沖縄から問う靖国裁判の行方」 2011年

7月14日 「バビロンの陽光」 2011年 (8月、9月は休み)

○スタッフから○

「さくら隊散る」(新藤兼人監督)は、非常に貴重な作品でした。戦時下、若い社会派演劇人が追い詰められて演劇慰問隊「櫻隊」を結成し、全国を巡業するさなか昭和20年8月6日広島で被爆、奇跡的に生き残った4名の悲惨な最期をドキュメンタリー手法で描いたものです。

その中の一人、仲みどりは東京に戻り東大病院で 治療、18日後の8月24日に亡くなります。彼女は"原 子爆弾症(傷)"第一号となり、彼女の肺、骨髄は今も 東大医学部標本室に保管され、カルテは広島大学原 爆放射線医科学研究所に保存されています。

資料館探訪 6

旧海軍兵学校江田(広島県) を訪ねて

海上自衛隊第1術科学校は旧海軍兵学校江田島の敷地にある。石造り・レンガ造りの旧海軍兵学校当時の建物が多く残っていて風情がある。

教育参考館がある。海軍の歴史に関する1200点の 資料が展示されていて、自衛隊員の心の勉強をする 場とされている。「先人苦心の跡をしらしめるとともに、 身を以って国に殉じた幾多の武人の精神に触れさせ ることにより、帝国海軍以来の伝統的精神を味得させ 持員基にとの掲げる で精育る育がれ がありらいる。



天皇の軍隊の旧軍と、文民統制下におかれている 自衛隊は旧軍隊とは一線を画してなければならない が、帝国海軍の延長線上にある展示である。旧態依 然の自衛隊を認識し、暗澹たる気持ちになった。(N)

「空襲·戦災を記録する会全国連絡会議」 名古屋で全国大会を開く

8月25日、26日、名古屋市立大学滝子キャンパスで 空襲・戦災を調査・継承している全国の団体・個人155 人が交流しました。

1日目は南守夫氏の講演「日本における戦争関係博物館の現状と課題」に続き、椙山女学園中学生による平和学習、名古屋市立大学生らによる「ピースあいち」の英語版パンフレット作成、民間戦争被害者への補償を求める運動など6報告がありました。夜の懇親会では90名を越える参加者が名古屋めしを食べ交流を深めました。

2日目は北海道から大分まで全国各地の20人が報告、新たに岡山市立の平和資料館が誕生することなどが報告されました。午後は、「ピースあいち」と名古屋市内の戦跡を見学して大会は終了しました。

総会報告

多彩な運動を決めた一第20回通常総会が開かれる

2012年5月26日(土)、「ピースあいち」の1階ホールで、第20回の通常総会を開いた。その報告のなかでは、開館以来の来館者は前年度末で、32,000人を超えた。入館者に若干の減少は見られるものの運営は順調に進んでいる。この間、会員拡大の取り組みは不十分で、800人前後で推移している。

次いで議事に移り、開館5周年記念としての「原爆の図展」をはじめ幾つかの企画展やイベントを準備するとともに、「語り手の会」による語り継ぎの活動、映像による学習会、戦争遺跡探訪、ボランティア研修、ガイド研修会の開催などを申し合わせた。

『ピースあいちニュース』の発行をはじめ「ブックレット」、「メールマガジン」の発行、外国版パンフレットの作成などを予定し、5周年記念に当たっての募金を行うことを決めた。多彩な活動が予定される総会であった。

月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

ピースあいちの運営を支えてください。

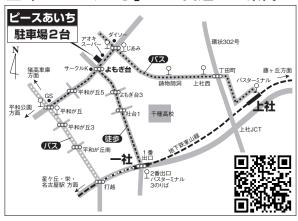
入館者数は、2012年4月~8月で4,652人(内子ども897人)で、開館以来の累計では37,521人(内子ども7,119人)となっています。

当館の維持・運営は、入館料とNPO会員[正会員・賛助会員]の会費及び寄付金によって支えられています。是非、会員登録して「ピースあいち」を支えて下さい。

正会員(年6,000円)は会員証提示で無料入館できます。 賛助会員(年3,000円)には無料入館券一枚をお渡ししています。

また、団体・法人には、「支援団体」(年/一口1万円)として登録をお願いしています。その外、寄付も受付ています。「ピースあいち」への寄付は、確定申告で約50%が税額控除の対象となります。

■「ピースあいち」への交通のご案内



【ピースあいちの利用案内】

- ●開館日 火曜日~土曜日
- ●開館時間 午前11時~午後4時
- ●休 館 日 日曜日·月曜日·年末年始
- ●閲 覧 料 大人 300円 小中高生 100円
- ●2階の常設展示室のほか、1階には「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示、3階には「戦争と動物たち」の展示があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーがあります。1階のみの利用は入館料は無料です。
- ●学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望 される場合は、事前にご相談下さい。
- ●駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

●編集後記●

「原爆の図展」では、三々五々と来館者の流れは絶えなかった。その数は2,296人に達した。市民の平和への関心の高さを窺わせる。また、開館5周年としての500万円カンパにも予想を超えて、約750万円の浄財が寄せられた。ありがたいことだ。お金ばかりではない。「平和を守ろう」という心を寄せられたと受け止めている。

このところ、戦時遺品の寄贈が相次いでいる。遺品の受け継ぎの世代交替を思わせるが、「ピースあいち」の知名度が上がったかと思う。試行錯誤を経て、どうにか基盤が出来た5年間であった。これからは、スタッフ・ボランティア共々心を寄せ合って、高らかに掲げた「平和の灯」を消さないようにしたい。 (S)